

令和3年度山梨県立吉田高等学校 学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針Yoshida PRIDE を持って未来を生き抜くことが出来る生徒を育成する

本年度の重点目標	1 生徒の知識活用能力を高める
	2 生徒の主体性を高める
	3 人とかかわりの中で生きていることを自覚させる
	4 「働き方改革」を踏まえて業務の見直しを図る

達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)
	B	概ね達成できた。(6割以上)
	C	不十分である。(4割以上)
	D	達成できなかった。(4割以下)

評価	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

自 己 評 価			
本年度の重点目標			
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
1	生徒の知識活用能力を高める	※1 吉田高校グラデュエーション・ポリシーを意識し、生徒の主体性をさらに育成する授業を実施する。	外部アンケート等
		評価を適切に行い、生徒の自己効用感、自己肯定感の高揚を図る。	外部アンケート等
		授業と連動した課題を設定し、知識の活用・定着を図る。	外部アンケート等
2	生徒の主体性を高める	常に「分析し、思考し、創造し、発信する」機会の提供を意識した指導を行う。	外部アンケート等
		身の回りに存在する課題を発見し、他者との関係の中で「傾聴し、想像を共有し、行動する」ことができる生徒像を意識した指導を行う。	外部アンケート等
		自分の言動に責任を持ち、自ら行動する態度を養う。	外部アンケート等
年度末評価(2月14日現在)			
自己評価結果		達成度	成果と次年度への課題・改善策
・本校のスクールポリシー(吉高GP)に対しての保護者の理解度は達成率89%と高い評価を得ている。職員の90%もスクールポリシーを意識して生徒への指導を行っている。しかし生徒に関しては保護者・職員よりも低い達成率(80.5%)である。一方で90%以上の生徒はスクールポリシーの8つの力の伸長を感じ、意識せずとも8つの力の成長を感じていることが伺える。 ・授業に関して、生徒が主体的に参加できる授業を実施している教員の割合が90%を越えて、同様に90%の生徒も主体的に授業に参加しているが、「授業の楽しさ」を感じている割合69%と低く、「楽しさ」を感じさせる指導の工夫が必要であることを表している。 ・生徒評価に対する教員の達成度は98.0%と高い。一方で、生徒が学習を楽しんでいる割合は、全学年で69.3%である。教員の評価自体は正しく行われているが、生徒の授業への満足度は低く、評価の方法と授業への満足度(楽しさ)を結びつけるための改善が必要であることを示している。 ・授業に対して楽しいと感じる生徒の割合が3年生を除いて低下が顕著である。これは分散登校でのリモートによって、個々の通信環境から授業内容を理解しにくい状況ができてしまっていることが大きな要因だと考えられる。しかし授業で生じた疑問を自ら解決しようとする意識は高いことから、授業の在り方を工夫していくことが必要である。		A	成果 ・生徒の知識活用能力を高めるという点では昨年度比からは降下しているが全般的に高い水準の達成率である。授業が楽しいという部分の達成率は十分とは言えない。知識活用能力を伸ばすよう、学びに対しては主体的、能動的であった。 課題・改善策 ・生徒が主体的だと感じる授業改善を今後も継続して行っていくために、カリキュラムマネジメント委員会を通じ、教科横断的な視点から情報の共有を図り、授業の楽しさにつなげる対策を図っていく。 ・対面する機会が減っていく状況下で生徒たちに吉高GPへの意識付けを維持していく方法を考え、実践していく。 ・令和4年度入学生より観点別評価導入に伴い、全学年を対象として、生徒の良さを評価する評価を引き続き適切に行っていくたい。また、学習内容の難易度にかかわらず、教科の魅力を伝えながら、学習に対する関心高め、達成感や結果の向上を生徒自らが感じられることによって自己効用感、自己肯定感の高揚につなげていく。 ・生徒たちの学習に関する疑問点を自ら解消しようとする姿勢といった学びへの主体性を生徒に対して明確に評価する方法を考え、実践することで授業の楽しさにつなげる。 ・リモート授業はこれからも続くと思予想できることから、個々の通信環境の格差を考慮しながら、授業改善を各教科を中心に考えていかなければいけない。また、対面・リモートそれぞれのメリットを考えて、適した授業を展開していく必要がある。対面に限らず、授業進度と連動した課題の内容の提示や生徒自身が考える時間を与える工夫も行い、自立した学習者の育成を実践していく。
*1学年 教科の授業や総合的な探究の時間を通じて、生徒が主体的に学ぶ機会は十分に設定され、生徒の項目の達成率は86.8%と高い。しかし、創造力・発信力の部分については顕著に形として表れておらず、1年間の探究活動の成果物に関しては全体的に物足りなさを感じているものであった。生徒は部活動との両立に関しては全校で最も高い83.9%の達成率であった。 *2学年 年度当初より、進路研究の一環として「外」へ視点を向ける指導をしている。勉強と部活動の両立に加え、資格試験、各種コンテスト・発表会、インターンシップ(体験活動)、大学のオープンキャンパス、ボランティア活動等に積極的に参加し、活躍の場を学校の外へと広げる呼びかけを随時行ってきた。また、修学旅行を実施するにあたり、相手の立場になり、その場その場で【相応しい行動】とはどのようなものかを常に問いかけ、想像力の涵養に注力した。その結果、達成率79.6%と結果となり十分に生徒は主体性を高めることができたとして自己評価を行っている。 *3学年 主体性を高めるための取り組みとしては各行事では最高学年としての自覚を持って取り組むことを意識させ、1、2年時に経験したことをさらに進化させるよう求めた。その結果、コロナ禍の中において学園祭などの生徒会行事、部活動の実施方法など難しい局面においても主体的に取組み、成功させることができたことが77.8%という数値に表れている。		A	成果 学習と部活動の両立という点では、行動制限がかかる中で、学年を追うにしたがって達成率は低くなっているが、自分に対する課題への取組や自己の言動への責任感という点では高い達成率を維持している。概ね、生徒の主体性を高めることができています。 *1学年 課題・改善策 教科・総合・LHR・学校行事・部活動に対するカリキュラムマネジメントを一層推し進め、生徒一人一人の主体的な活動に対して、教員が関わり支援する体制の構築が必要である。特に「分析し、思考し、創造し、発信する」「傾聴し、想像を共有し、行動する」という部分を伸長できる指導を行い、形としてoutputできることを重視していく。 *2学年 課題・改善策 ・部活動を始めとする諸活動において、何かアクションを起こそうとするとその矢先に、感染症拡大による活動制限がかかり、もどかしい思いをしている生徒が大半だと思う。高校生活最後の1年を迎えるにあたり、環境やその時の状況を悔やんだり憂いたりするのではなく、「その中で出来る最高を目指す」修正力、打たれ強い心を養う指導行う。 ・そのために、一番大切なことは、評価の数値にとらわれすぎることではなく、思ったことや感じたことを、我々職員がその都度躊躇せずに、職員が自分の言葉で訴えていく。 *全体 課題・改善策 問題番号5の達成率の向上を図る意識付けと実践に向けて指導法を構築し、実践する。

山梨県立吉田高等学校 校長 古 屋 勇 人

学校関係者評価	
実施日 (令和4年2月19日)	
評価	意見・要望等
4	・吉高GPは浸透している。自己肯定感も育成されており、コロナ禍の下、一番大切な力の向上が見られている。 ・リモートは、通常の授業に比べ、双方に苦労がある。(教える側、学ぶ側、学校環境、家庭環境)そのような環境の中で、学ぶ姿勢の数値が良くあがっているのは立派である。 ・授業が面白くないということについて、企業でもデジタルスキルはあるが、じっくり考えることが苦手で仕事が面白くないと感じる若者が増えている。それでも、一生懸命やっている若者が多い。 ・オンラインの活用について、内容は伝わるが、雰囲気伝わりにくいというデメリットもある。 ・授業が楽しいと思う生徒の数値が低いことについて、リモート授業が多い中でこれだけの数値が出ていることに、教師の取り組みを評価したい。生徒が学ぶことが楽しいと思えるようになって欲しいという目的を持って授業づくりをすることを心がけてほしい。 ・「授業が楽しい」という項目の達成率は低い、「主体的には学べている」という項目の達成率は高いので、教師が仕組みを工夫していることが見受けられる。 ・「授業が楽しい」については、授業内容と共に「学ぶことの楽しさ」を体得させる授業改善に期待する。 ・教師が授業を楽しむこと、楽しい授業を組み立てる意識も大切。「I」「YOU」「WE」の視点を授業に組み込む中で、生徒の自己肯定感を育てたい。 ・具体的方策の自己肯定感、自己高揚感、自己有用感について、同じ表記で統合した方が、分かりやすいのではないかな。 ・自己有用感、自己肯定感、自己効用感の3つの似た意味の言葉が使われている。意味を確実に理解した上で、目的に合った言葉を使って、評価を行うべきである。 ・「自己効用感」「自己肯定感」に関して、自己受容に関わる「自己肯定感」により焦点を当てた取組みが必要でないかと考える。これはレジリエンスにつながる部分であり大切であると捉える。
	・地域をリードする高校として、意欲を持って部活動との両立を実現している背景に、主体的で自治的な活動が見受けられる。 ・両立(マルチタスク)が出来る人、出来ない人が分かれるので、全員に求めるのではなく個別対応で集中できることに取り組ませることが必要だと考える。 ・研究課題の設定を考える時間が少なく、難しいのでアプローチの仕方を工夫すると良い。小中学校で研究課題を持っている生徒は継続させてもよい。 ・自ら考える力が今後も育む場が大切であると考えている。 ・若者は数字がないと納得しない面もありますが、これを言語でロジカルに説明できると説得力が高いと感じています。 ・中高連携の視点から探究活動のテーマ設定など中学校での学びを活かす取り組みが求められる。

自 己 評 価			
	本年度の重点目標		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
3	人とのかかわりの中で生きていることを自覚させる	周囲との関わりの中で、自己有用感を養う。	外部アンケート等
		社会に関心を持ち、未来の社会について考える態度を養う。	外部アンケート等
		ユネスコスクールへの加盟申請を契機とし、SDGsを意識させるとともに、ボランティア精神を養う。	外部アンケート等
4	「働き方改革」を踏まえて業務の見直しを図る	生徒と触れ合う機会を増やすためにも、業務全体を見直し、分業と協業を推進する。	外部アンケート等

※1）吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）・・・本校3年間を通して8つの力（自己肯定力・傾聴力・分析力・思考力・発信力・想像力・創造力・行動力）を身につけること。

留意点 （1）重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。

（2）学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

学校関係者評価	
実施日 （令和4年2 月19日）	
評価	意見・要望等
3	・かえる舎や商工会議所との連携によって、より一層進展していくことを期待している。地域をリードする高校ゆえに他校との交流が難しい側面がある。他校と比べ、地元に残る可能性が少ない生徒が多いという背景の中で、良く取り組んでいることは大変素晴らしい。日本の都市部以外の多くの地域が抱えている課題に対して、良く取り組んでいる。 ・SDGsについて取り組んでいかないと、企業として成立しない時代であるので、学生の中から意識させることはよいことだと思う。 ・生徒の課題研究の取り組み、学びについて、環境に関わる仕事をする立場から、感謝したい。 ・社会も経済も美しい環境があって成り立つということを考えると、環境を守るということは社会や経済の基盤になるということを学生時代から気づいてもらいたい。 ・コロナ禍で、発表の場に参加できなかったが、新しい視点を発見していく場として生徒の研究発表を今後も共有していただきたい。 ・地域との関わりについての調査において、「興味」、「意識」という言葉が使われているが、受け取り方には個人差があるので、基準を明示すると、対象者は回答しやすいと思う。意識が高い生徒ほど、評価が厳しくなるはずである。 ・人との関わりについては、コロナ禍以前と比べることができないのではないと思う。新しい基準で判断すべきである。 ・地域のことを意識させるには、核家族化が進み、地域行事の継続が難しい環境にある。地域への関心が停滞しているのは大人社会にも課題があるのではないと思う。 ・地元の商工会議所やその他の団体とも生徒と一緒に活動できる体制を作り、生徒が地域とのつながりを感じることができるように取り組んでいきたい。 ・総合的な探究の授業のテーマ設定の充実を願う。 ・生徒に「シビックプライド」を教えることは大人の責任である。吉田高校は地域に対する市民としての誇りを高める努力をすべきである。 ・織物など地域の地場産業に対して、更に目を向けさせる工夫を求める。
	・コロナを通して、従前のものを見直す機会として先生方一人ひとりが新しい視点を生み出してほしい。 ・ワークライフバランスについて企業でも残業が厳しくなっている。時間ができるという良い面もあるが、必要な仕事がやりきれないことが逆にストレスになることもある。不要なことは削っていくことが必要になってきている。 ・細かい資料作りも教員のオーバーワークに繋がっているのではないと思う。資料の簡略化や委員と一緒に取り組むことで、分かりやすさにつながるのではないと思う。それが、ライフワークバランスに繋がるのではnないだろうか。先生方を守る上でもコンパクトにできる部分はスリム化した方が良い。 ・コロナ禍で事務が偏らざるを得ない中、難しい状況であるが、リモートの活用を含めて、業務改善に取り組んでほしい。